HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	新人文学と人類学 ： われわれは本当にサピエンスか？
著者	須田，一弘; SUDA，Kazuhiro
引用	年報新人文学(12)：2-5
発行日	2015-12-25

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

[巻頭言]

新人文学と人類学

――われわれは本当にサピエンスか？――

須田 一弘

「新人文学」とはどのようなものであるかについて、前号の巻頭言で安酸敏眞氏は「文献学と解釈学への自覚的回帰を遂行し、自然科学と社会科学の諸成果を取り入れつつ、人間とその文化を総合的に探究する学問であらねばならない」（傍点ママ）としている。「文献学と解釈学への自覚的回帰」という部分を除くと、それはそのまま、わたしが専攻している人類学の研究テーマを表している。わが北海学園大学人文学部および大学院文学研究科が標榜している「新人文学」ないしは「新人文主義」に、人類学という学問分野がいくらかでも資するところがあるとすれば、さまざまな時代と地域の具体的な生のあり方を紹介することで、人間と文化の多様性を知る手がかりを提供することにあろう。

さて、現在地球上に存在する人間は、その環境の多様性にもかかわらず、生物学的には一属一種に分類されている。これは、われわれ人間が多様な環境に対して、遺伝に基づく形質によってではなく、学習によって得られる文化によって適応していることが大きく影響している。そのため、類似の環境に暮

らしていながら、異なる文化をもつ集団がみられることになった。また、同属の種が他には存在していないということも、おおくの生物種にはない特徴である。一八世紀にリンネが名づけたわれわれの学名は、属名と種名を並べてホモ・サピエンス（*Homo sapiens*）である。ラテン語のホモ・サピエンスが表す意味は「賢い（*sapiens*）ヒト（Homo）」ということになる。現在では、化石人骨の発見とその研究から、これまでのおよそ二百数十万年の間、われわれの他に、ホモ・ハビリス（器用な人）、ホモ・エレクトゥス（立ち上がった人）など多くのホモ属が存在したことがわかっている。また、われわれホモ属は分類学的にはサルの仲間であり、哺乳綱（類）のうち霊長目に位置づけられる。つまり、われわれは動物の中の「霊長」であり、なかでも「賢い」とみずからを呼び、生物進化の頂点にいると考えていることになる。本当にそうだろうか。

前号の安酸氏も引用しておられるが、本誌創刊号の巻頭言で、当時の文学研究科長の大濱徹也氏は、「新人文主義」について「人間解放の名の下に、人間が自然を征服し、人間至上が『近代』の価値であると思いみなし、人間が欲望のおもむくままに世界を支配することに道を開いた人文主義が墜ちこんだ隘路を凝視し、人間が人間であるとは何かを問い質さんとするもの」、としている。われわれが霊長類であり、その中でも賢い人間であるというみずからの名のりは、まさに人間至上を体現したものと考えることができる。

ところで、古生物学の研究の積み重ねにより、地球上に生命が誕生した約三五億年前からこれまで、生物はおよそ五度の大量絶滅を経験してきたことがわかっている。そのたびに、全生物の七〇％から九〇％を超える生物が、わずかの期間に姿を消した。その原因は地球環境のおおきな変化であると考え

られている。そして、大量絶滅の後には、生き残った生物種が空いたニッチェを埋めるように、ふたたび種数を増加させていった。もっとも最近の大量絶滅は、およそ六千五百万年前の白亜紀末に起こったもので、一億年以上にわたり地球上をわがもの顔に闊歩していた恐竜をはじめ、およそ七〇％の生物種が絶滅したといわれている。当初、その原因としてさまざまな要因が考えられたが、現在では、メキシコのユカタン半島に巨大な隕石が衝突し、そのために発生した火災と、衝突時に巻き上げられた塵埃が太陽の光を遮ることで、全地球規模の気温低下を引き起こしたという、まるでＳＦ映画のような「隕石説」が定説となっている。

われわれ万物の「霊長」たる「賢い人」の祖先は、当時、小型で取るに足りない存在だったためか、かろうじて大量絶滅をのがれた。恐竜のいない地球で、まずは、アフリカの暖かい地域の樹上で暮らし、およそ七百万年前に木から降りて直立二足歩行をはじめた。その後、しだいに道具を使ったり、作ったりするようになり、約二百数十年前に「ヒト」となった。その一部はアフリカからユーラシアへと生息域を広げていった。そして、アフリカに残ったグループの中からおよそ二十万年前にホモ・サピエンスが登場し、再びアフリカから世界各地へと生息域を広げていった。これが、われわれのたどってきた道である。もし、白亜紀の末に巨大隕石が地球に衝突していなかったら、われわれはいまだに大きな恐竜におびえながら暮らす、取るに足りない存在のままだったはずである。知恵を持たず、みずからを「賢い」と名のることもなかっただろう。われわれは、スティーブン・ジェイ・グールドが「ワンダフルライフ」(早川書房、一九九三、原著は一九八九)で述べているように、偶然から生まれた存在にすぎない。

およそ六千五百万年前に隕石が地球に衝突していなかったら、われわれはこの世に存在していなかっ

ただろう。われわれが必然的な進化の頂点に位置しているのではなく、偶然に生まれた存在であることを自覚することは、人間至上主義を克服するひとつの足掛かりとなりうる。われわれが存在しない世界を想像すれば、たまたま存在することになったわれわれが万物の霊長であろうはずがないことは明らかである。われわれが本当に「賢い人」であるならば、そうした自覚を持つことこそが必要となろう。「新人文学」の可能性のひとつは、そのあたりにあるのかもしれない。

（すだ　かずひろ・北海学園大学教授）